

# 兼好の女性観に関する一考察

—『徒然草』を中心に—

張 晋 洙\*

〈目 次〉

I. 序 論	3. 男女の情
II. 本 論	4. 否定的 結婚観
1. 女性の讃歌	5. 愛情 無常観
2. 女性の人柄	III. 結 論
(1) 女性人柄の長所	参考文献
(2) 女性人柄の短所	

## I. 序 論

兼好の女性観を研究の論旨にすることは兼好が生きた当時の女性社会の思想と情緒を分析して見ようとするところにある。

また、その当時から現代に至るまでの女性観の変遷過程を調べてみて、どのような変化があったのか、または変わらない原初的な女性の心理が何であるかを把握しようとするところにある。先ず、ここでは兼好の女性に関する価値観と思想を把握しながら現代女性との変化された心理を推求しようとした。

兼好は若い時、華麗な宮庭生活から業務的、事務的に多くの人と接触した。それで、彼は特に、多くの女性との交際を通して女性の肉体的・心理的な魅力が彼の感受力に大きく作用して影響を及ぼしたと思う。また、異性としての感情に大きな刺戟を与えて圧迫して来たことだと思ふ。

一方、歴史的に見れば兼好が生きた時期は14世紀頃で、平安時代以後鎌倉時代から室町時代初期にかけての日本中世時代であった。その当

\* 韓國海洋大學校 助教授 (日文学)

時の人たちは王朝時代の貴族的な思考と封建的思想の目で女性像を見たので仏教的な側面から現われる女性観が主軸を成したと見ることができる。

そして、彼の人生歷程の中で数多くの体験と思想は境地に到達する程だった。彼の思想は50才を過ぎて書いた『徒然草』にすべてが含蓄されていると思う。

また、彼が考える女性に対して感じている思想を調べて見れば、その当時の女性に関しては完璧に近い程の女性観、恋愛観、男女の結婚及び愛情の無常をリアル (Real) に女性像を表現している。

また、兼好は女性が品位があり、理想的な女性であると表現してもいた。また、情欲の相対として男性の心を眩惑させるとして女性を警戒しなければならないと警告した。そして、仏教的律法に違背になるとして、または耐え難い色欲の対象であると率直に肯定もしていた。

本稿では兼好の女性に対する思想と情緒及び女性心理を道徳的な基準にはずれないように設定して置いて、いろいろな側面から考察しようとした。それで、彼が批判する女性について鋭利な判断は数百年が経つ今日まで多くの人たちに広く膾炙している。また、数世紀が過ぎた現代でさえ正確な女性観を指摘してくれたという点を高く評価している。

本稿の主題を説明すれば兼好の女性に関する価値観、哲学及び男女間の貞操問題まで分析して見て、そのような女性の思想と心理を糾明するのに研究目的として、細部的に次のように分けて分析しようとした。

初めに、女性に対する讃歌として教養ある女性を讃揚もし、二番目に、女性の人柄について長短所を論じて、三番目に、男女の情を調べて見て、また、男性は女性を警戒しなければならないとしており、四

(1) 赤根祥一、無常の思想、れんが書房新社、1980、P. 158。

番目に否定的結婚観を取り扱っており、五番目に愛情無常観に分けて研究検討して見た。

本稿は『徒然草全註訳』上、下巻及び小出光著の『徒然草』等を参照にして、その外多くの参考文献を抜萃して研究したことを予め明らかにしたい。

## II. 本 論

### 1. 女性の讃歌

兼好はりっぱな女性を称する時、先ず、教養があり、心根が美しく、言葉使いがやわらかい女性を讃揚し、特に、性格がよい理性的な女性を称讃している。

女性の偉大さについて第184段を例にあげて説明して見よう。

「世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にて持たれける、まことに、ただ人にはあらざりけるとぞ。」<sup>2)</sup> (第184段)

[政治家が世を治めてゆく上の道理は、自分で儉約することを根本とするのである。この松下禅尼は、女の身ではあるが、聖人の心持と通じている。日本全国を安全に保つほどの人をわが子として持っておられた禅尼は、ほんとうに、なみなみの人ではなかったということである。]

りっぱな人の後には必ずりっぱな母親がいるという事実を言っている。

また、りっぱな女性は聖人の精神と同じ考えを持っているという点と、また孟母三遷のような内容で女性の偉大さを讃揚している。

東西古今を通じてりっぱな人物の家庭環境を調査して見れば大部分

(2) 安良岡康作、徒然草全註訳下巻、角川書店、1990、P. 254。

の家庭は人格と教育等を自然に習得するようにしてくれる母親のあたたかい愛と精誠があるという事実を知ることができる。また、りっぱな母親の家庭教育がもっとも大きな役割をするという点を強調している。ここで松下禪尼は天下を統治するむすこに儉約が世の中を治める根本であると言う点をよくおしえている。

今度は女性の姿について例をあげて見よう。

「かぶし・かたちなどいよいよと見えて、えもいはぬ匂ひのさとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるも、ゆかし。」<sup>3)</sup> (第105段)

[頭つきや容貌が大変立派に見えて、何とも言えないにおいがさつとかおって来たのは、趣深く感ぜられる。その声などが、端端聞えているのも、はっきり聞きたい気持がする。]

女性の美の象徴は美しい肉体の所有にあり、美しい魅力のポイント(point)を一つ一つ指摘しながら詳しく猫写し表現している。遠くから女性を見る時、先ず髪の色を視覚的に美しく見えるかどうかを見て、その次かおつきを美覚的に見る。それから女性の化粧のにおいを嗅覚的にかいで、その次彼女のやわらかい声を聴覚的に聞く。それから、女性のすんなりした脛を直接自分が触って見るように触覚的に感じる。このように兼好は女性の魅力点を分析し美しさを讃揚している。今度は女性が男性について感じる感情について例をあげて見よう。

「女は、髪のめでたからんこそ、人の目立つべかめれ、人のほど・心ばへなどは、もの言ひたるけはひにこそ、物越しにも知らるれ。」<sup>4)</sup> (第9段)

[女性というものは、髪の色立派なのが、最も、他人の目をひきつけるようであるが、しかし、その人柄・気だてなどは、物を言っている声によって、物を隔てて聞いても、よくわかるものである。]

(3) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 449。

(4) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 50。

どのような男性でも女性の誘惑にはたえがたい。そのような女性はすべての享楽の手段を動員して放蕩の中にのめりこむようにすることだ。それで、男性の方から見る女性の魅力は恋情に落ちる女性の態度と姿勢から感じることができる。

一度男性を体験する女性が男性について専念をかたむけて、男性の自尊心の満足をうめてやり、男性については無自覚的な愛情の神秘性をよく表現している。

今度は伯母の下でそたった九條忠教が品行から特別に教育をよく受けた点を例をあげて説明すれば、

「『浄土寺前関、白殿は、幼くて、安喜門院のよく教へ参らせさせ給ひける故に、御訶などのよきぞ』と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、『あやしの下女の見奉るも、いと恥づかしく、心づかひせらるる』とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣文も冠も、いかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。』<sup>5)</sup> (第107段)

「『浄土寺の前の関白殿は、幼いので、安喜門院がしっかりとお教え申し上げあそばしたために、おことばなどが立派なのだ』と、ある方が仰せられたとかいうことである。山階の左大臣殿は、『卑しい下女に見られるのも、ひどくきまりわるく、自然に気を使うようになるものだなあ』と、そうおっしゃった。もし女のいない世の中であったら、装束の付け方も冠のかぶり方も、どうともせよ、きちんとする人もありますまい。』

伯母である安喜門院がよくおしえたために言葉づかいとか行動が正しく品位がある関白である九條忠教と言うりっぱな棟樑をそたてたとやっている。両親や母親がいない時にも、りっぱな伯母の下でそたった境遇でも同じようにりっぱな女性の下で、成長する人がやはりりっぱて偉大な人が出るという点を強調している。また、東西古今を通じ

(5) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 458。

て自分の子をそたてる方法はまったく同じたと言う点をおしえさとらせている。

日本でも仏教・儒教・道教にそまって着こなし一つでもきびしくまもるようにする点がすなわち、兼好の徹底した思想として、その当時の社会相の一面を反映していることたと言っている。

以上のようにいくつか例から見のように女性は教養があり、心根がきれいで、機智がなければならないと言って、愛情の神秘性も表現している。特に兼好はりっぱな女性ははりっぱな自分の子やおいのような偉大な人物を輩出させると女性をたいへん讃揚している。

## 2. 女性の人柄

女性の人柄を説明すれば性格、姿態、言語、能力等、いろいろな面から人の人格と品性を現わす女性の人となりをつまびらかに総括して言っている。

仏教・儒教文化の影響下からつくられた制度・慣習・宗教・法律等に慣れた女性の人柄は自分の人生の一部に内面化させた。それで、女性の人柄を長短所に分けて説明しようとする。

### (1)女性人柄の長所

女性の人柄について長所の例をあげて説明して見よう。

「女の方より、『仕丁やある。ひとり』など言ひおこせたるこそ、ありがたく、うれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と人の申し侍りし、さもあるべき事なり。」<sup>6)</sup> (第36段)

〔その女の方から、『仕丁がおりますか。おりましたら、ひとり貸して下さい』などと手紙でいってよこしたのは、実に思いがけないことで

<sup>6)</sup> 安良岡康作、前掲書上巻、P. 179。

あって、うれしいものだ。そうした気だてを持っている女こそ好ましいものだ」と、ある人が申しましたことは、いかにももっともなことである。]

男女の仲にどのような事情で男性が女性を遠ざける時、知恵ぶかく男性がたずねてくる方法を提示してくれる。それでは、男性がしかたなく引きつってくる姿になる時、女性の才知と機智が卓越して感じられる。

自分の人生に責任をもつことができる成熟した女性に自分の一生を具現させて自覚できる女性を称讃している。

女性が男性に気軽に、先ず機会をつくって、勇気と意志を要求する時、男性はそのような女性の人柄を好み、称讃する。

また、他の外をあげて説明して見よう。

「よきほどにて出で給ひぬれど、なほ、事さまの優に覚えて、物の隠れよりしばし見るたるに、妻戸をいま少し押し開けて、月見るけしきなり。」<sup>7)</sup> (第32段)

[適当な時間がたって、その方は女の室からお出になってしまわれたのであるが、自分は、この家に住む女の様子が優雅なものと思われて、物かげからしばらく見ていたところ、女は、送り出した妻戸をもう少し押し開いて、月を眺める様子である。]

男性を送り出した後、ただ、門を閉めて入らないで、妻戸をもう少しあけて開いて月をながめ、その男性を思うそのような風流があふれて粹がある女性を称讃している。

手段と方法をえらばないで男性を誘惑するそのような女性ではなく、男性を深く考えさせるようにする教養があり、深い思索に耽けることができる優雅でやわらかい女性について「その方」は感動している。

また、他の例をあげて説明して見よう。

「雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事ありて、文をや

(7)安良岡康作、前掲書上巻、P165。

るとて、雪のこと何とも言はざりし返事に、『この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返すかへす口をしき御心なり』と言ひたりしこそ、をかしかりしか。』<sup>8)</sup> (第31段)

[雪が趣のあるさまに降っていた朝、ある人のもとへ、言ってやらなくてはならぬ用事がある、手紙をやるうとして、雪のことを何とも書かずにやった、その便りの返事に、『わたくしに、この雪を見てどう感ずるかとおっしゃらないくらいの、心のひねくれている方のお命じになる事を、どうして承知することができますか。重ね重ね聞けない、あなたのお気持です。』と書いてあったのは、実に面白いことであった。]

雪がとても美しく積った日の朝、情趣が深い光景はそれこそ明るく清く寂かな静寂、そのままであるがどの方にか送った手紙の内容が雪について一言もなかったと言った。

その手紙の中で女性は教養もなく、風流もない男性をとがめる返事で、兼好は抗議するそのような女性に魅力を感じた。また、知性がある男性の目で女性を透視する姿は教養もあり、風流を知るそのような女性を称讃している。

また、他の例をあげて説明して見よう。

「火はあなたにほのかなれど、もののきらなど見えて、にはかにしもあらぬ匂ひいとなつかしう住みなしたり。『門よくさしてよ、雨もぞ降る、御車は門の下に、御供の人はそこそこに』と言へば。』<sup>9)</sup> (第104段)

[燈火は向こうの方にほんのり明るい程度であるが、物品の美麗さなども目に入って来、訪問を知って急いで焚いたのではない香のかおりが大そう親しみを感ずる様子に住んでいる。『門をしっかりとしめてしまいなさい。雨が降るといけないから、御車は門の下へ引き入れて、

(8) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 163。

(9) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 444。



お供の人はどこそこに休んで下さい』などと誰かが言うと]

品位がある女性と社交する時はいつも相対方に楽な気持を持つようしてやる。すべての事は詳しく処理して男性が全く不便なく泊まるようにいつも準備をしておいて、下女にも予め教育をしておく。このように自身の処地に対して不安と苦痛も考えないで、いつも訪ねて来ることができるよう家庭雰囲気を作っておいて、待つ女性の心根が美しいと言っている。優雅で知恵がり、品位ある女性はどのような不遇な環境にもよく耐え忍ぶことができると女性の人柄を兼好は称讃している。また、他の例をあげて説明して見よう。

『宝劔をばその人ぞ持ち給ひつる』など言ふを聞きて、内なる女房の中に、『別殿の行幸には、昼御座の御劔にてこそあれ』と忍びやかに言ひたりし、心にくかりき。』<sup>10)</sup> (第178段)

『宝劔をば、あのお方がお持ちになった』などというのを聞いて、御簾の内部にいる女房たちの中で、ある人が、『別の御殿へ行幸なさる時には、昼御座の御劔なのに』とこっそりと言っていたのは、奥ゆかしく感ぜられた。]

品位ある女性は官職の高い低いに関係なく聡明に事を処理して、いつも不便で予期しないことをすぐ解決することができる瞬間的な知恵を持っている女性はいつも聡明に感じられると言っている。天皇が別宮に入られる時持って行かれる物は劔であると言う事実を下女が臣下に予め知らせてやるその事実の内容を知らずにいた臣下が受ける苦痛な立場を解消させてやると言う瞬間の機知を高く評価してとても聡明に感じられると兼好は下女を称讃している。このような点は昔も今も同じく女性の聡明さと品位があるように見えると彼はいつも感じていながら、そのような女性を極讃している。

10) 安良岡康作、前掲書下巻、P. 225。

## (2) 女性人柄の短所

女性人柄について短所を例をあげて説明して見よう。

「女は、額髪明れらかに掻きやりまばゆからず顔うちささげてうち笑ひ、盃持てる手に取り付き、よからぬ人は、さかな取りて、口にさし当て、自らも食ひたる、様あし。」<sup>11)</sup> (第175段)

[酔っぱらった女は、額髪をあらわにかきのけたり、恥ずかしさもなく顔をあおむけて笑ったり、他人が盃を持っている手につかまったりし、下品で無教養な男は、酒のさかなを手にとって他人の口に押しつけてたべるように強制し、自分でもそれをたべているのは、みっともないものだ。]

酒を飲んで酔った女性の恰好の悪い姿を表現している。東西古今を通じて無礼で、低劣で見苦しい女性は同じことであるようである。さかずきをにぎる男性のうでにすがりもする女性の酒浸りの姿をよく表現している。

また、兼好は酒を「迷乱起罪之本」として厳制しつつ<sup>12)</sup> 彼は倫理的、法律的な違反者を非難し、非人間化された女性を無視する低劣相の一面を言っている。

今度は第70段の例をあげて説明して見よう。

「座に著きて、先ず柱を探られたりければ、一つ落ちにけり。……いかなる意趣かありけん、物見ける衣被の、寄りて、放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。」<sup>13)</sup> (第70段)

[定め席について、まっさきに琵琶の柱を手でさわって具合をみられたところ、その一つがとれて落ちてしまった。…… どんな恨みがあったのであろうか、見物していた衣被の女が、牧馬に近づき、柱をとりはずして、もとのように琵琶につけておいたということである。]

(11) 安良岡康作、前掲書下巻、P. 204。

(12) 藤原正義、中世作家の思想と方法、風間書房、19、P. 95。

(13) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 311。

この内容は琵琶楽器にあるひもの支えをはずして捨ててしまったために演奏する時正しい琵琶楽器の音がまともに出ないようにする演奏妨害の工作の行動である。

女性に怨恨を持たせれば結局被害を被るようになった女性の奸巧で、残忍な心理的描写を表現している。

今度は女性の心性について例をあげて説明して見よう。

「かく人に恥ぢらるる女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相深く、貪欲甚だしく、物の理を知らず。ただ、迷ひの方に心も速く移り、訶も巧みに、……その事、跡よりあらはるるを知らず。すなほならずして拙きものは、女なり。」<sup>14)</sup>(第107段)

[これほど男に気をおかせる女というものは、どんなに立派なものか、と考えて見ると、女の本性は、すべて、ねじけている。女は、自我に執着する状態が深く、やたらに物をほしがらる欲がつよく、物の道理を覚らない。ただ、迷いの方面にたちまち心が傾いてゆき、口先も達者で、……そのうわべを飾っている事が、言った後の様子からたちまちばれて来るのをも気づかない。心が率直でなくて、愚劣なのは、女というものである。]

ここで兼好が宮廷で勤務する時多くの女性と交際があったと言う点を類推して分かることができる。兼好は女性の心を誰よりよく把握していて、また、女性の根性をよく表現している。

この内容のように女性は我執が強く、貪欲が深く事物の道理を見分けられない。また、自分が有利な方向にすばやく考えがまわって口がうまく、その内容がうそであると言うことがばれることも知らずにいた。

このような原初的な女性心理分析は東西古今を通じて正確で確実に核心を分析したと言っている。しかし、そのような女性に対して男性が

14) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 461。

迎合しようとすることは本当に嫌だと率直な兼好の気持ちを明かにしている。

女性の人柄を総合して説明すれば、長短所を分けて兼好の思想を分析して見た。

女性の人柄を簡単にまとめて言えば、男性が女性を遠ざける時、知恵深く男性がたずねてくる方法を提示する才知を讃揚して、教養があり、瞬間的な機知で他の人の立場を免れさせる聡明さを讃揚していた。短所としては放蕩な酒浸りの女性の姿と、猜忌、嫉妬を措写していて、東西古今を通じて女性の原初的な心理変化は同じである点を強調している。

### 3. 男女の情

男女間の愛慾の本能は賢愚の区別なく耐えることが難しいと兼好は見ている、唯愛欲の煩惱から解放するためには欲情を禁忌視する仏教思想を克服することを願った。また、愛情とは必ず会うことによって、成し遂げるだけではないと考えた。そして、内的欲求の欠如を指摘して失恋、惜恋、追憶恋等、あわぬ恋でも人間をもっと深く成熟するようにしてくれ、内部に隠れた情趣をまあたらしく感じさせてくれる余情の美について言っている。

特に、不貞な女性は社会的蔑視を受け没落して一生を不幸に送るとした。また、男性は常に女性の誘惑を警戒しなければならないと警告しているながら、噂と評判が後世にまで他人に恥辱を受けるので常に注意しろと男女間の情について悟るようにしている。

今度は第8段の例をあげて見よう。

「久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、まことに、手足・はだへなどのきよらに、脛え、あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。」<sup>15)</sup> (第8段)

<sup>15)</sup> 安良岡康作、前掲書上巻、P. 47。

[久米の仙人<sup>16)</sup>が、洗濯している女のはぎが白いのを見て、通力をなくしたということであるが、このことは、ほんとうに、手足・皮膚などが美しく、また、肥えていて、脂肪が豊かについているのは、他の美しさでないわけだから、なるほどそのとおりであろう。]

女性の美しさと愛慾の本能の中でいくら神であろうとも男性は女性の若若しい魅力に神通力を喪失するほど耐えがたいことで常に気をつけなければならないという警告的な内容である。

人の心というのはばかであるので仏教からの禁慾思想を守るよう警醒している。

また、他の例をあげて説明して見よう。

「まことに、愛著の道、その根深く、源遠し。六塵の樂欲多しといへども、みな厭離しつべし。その中に、ただ、かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも、若きも、智あるも、愚かなるも、変る所なしと見ゆる。」<sup>17)</sup> (第9段)

[ほんとうに、女への愛情に執着する方面というものは、男にとって、その根が深く、源が遠く、どうすることもできないものである。人間の六根の対象となる、さまざまな刺激が起す願や欲は多いといっても、努力次第ですべて捨て去ることができるものである。

しかし、その中で、ただ、この女性に心を迷わせることだけが、ひとつだけ断ち切りがたいということは、老人も、青年も、賢い人も、愚か者も、あらゆる男にわたって共通していると思われる。]

六塵中にも愛慾の本能は賢愚者に関係なく最も避けがたい。しかし、自ら自制して恐れながら控えなければならないと兼好は主張している。また、人間は愛慾の煩惱から外れなければならないと仏教からの禁忌思想を強調している。

今度は昔の恋人を考えて、歳月の無常さについて説明して見よう。

16) 空を飛ぶ神通力を持ったと言う伝説的な人物  
17) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 51。

「亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる、見出でたるこそ、ただ、その折の心地すれ。……手馴れし具足なども、心もなくて、恋らず、久しき、いとかなし。」<sup>18)</sup> (第29段)

[亡くなった人の、気ままに文字を書き散らしたのや、絵を慰み半分に描きつけたのを見いだしたのは、ただもう、その当時の心地がしてくるものである。……亡くなった人が日常使い馴れていた道具類なんかも、情のない物であって、昔と変わることなく、いままで存在しているのが、亡くなった人のことを思うと、何とも悲しくなってくる。]

今は会うことさえできない故人を思い出させるとした。また、慕わしい昔の人と会う時、思い出させることは字を書き、絵を書いた昔の時節が走馬灯のように回想されともしている。その上、故人が使った道具等から歳月の無常さを感じられるとした。自分自身を振り返り、反省するようにして、やるせない気持を自分自身の心の中に呼訴もして見るようにするともした。

今度は男女の愛情について説明して見よう。

「男女の情も、ひとへに逢ひ見るをば言ふものかは。逢はで止みにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。」<sup>19)</sup> (第137段)

[男と女との恋愛も、いちずに関係を結ぶことだけをいうものではあろうか。そればかりでなく、女と関係を結ぶことができずに終わったつらさを思ったり、女の恋心から末の遂げられない、はかない約束を嘆いたり、長い夜を相手と一緒になれずにひとりで過ごしたり、恋人のいる遠い彼方を心に思いやったり、あるいは、茅の低く茂って荒れ果てた住居で恋人と逢った昔を思ひ出したりするのこそ、恋の情趣にひたりきることと言ってよからう。]

男女の愛情というのは直接会って密会することより失恋、惜恋、回

<sup>18)</sup> 安良岡康作、前掲書上巻、P. 149。

<sup>19)</sup> 安良岡康作、前掲書下巻、P. 15。

想恋、追憶恋<sup>20)</sup>等が人間をもっと深く、一層成熟させてくれることだという点を分かるようにさせている。真正な男女の愛情を悟らせている。今度は不貞な女性について説明して見よう。

「荒れたる宿の、人目なきに女の、はばかり事ある比にて、つれづれと籠り居たるを、或人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことことしくとがむれば。」<sup>21)</sup>

(第104段)

[あれていて、人の訪れもない家に、ある女性が、世間体を憚ることがある時分で、所在なくその中に籠っているのを、ある方が、お見舞なさろうとして、夕月がまだほの暗いうちに、人目を避けて探し求めたおいでになったところ、その家の飼い犬がぎょうぎょうしく怪しんで吠えるので]

不貞な女性が謹慎している間、ひとりさびしく過ごしている時、ある方が人にわからないよう訪問して尋ねる時、その方にだけはあまりにも品位よく行動する姿を称讃している。そして、切ることができない男女の情を表現している。

しかし、不貞な女性は一度の過まちで、社会的蔑視を謀免することができず、結局、没落にあい社会的に指弾を受けることになるとした。そして、そのような立場になれば荒廃した邸宅でさびしく暮らすことになる点を強く指摘している。

兼好は女性を遊戯的であるのと礼義的である女性とに区分して、遊戯的な女性は結局、禁慾的な女性型として、男女人間関係の垂直化を論ずるようにしており、このような女性の運命は桎梏の人生を免がれることができなくなると言っている。

今度は男女の熱愛が平生を不幸にすることもあるので注意しろという例を上げて見よう。

<sup>20)</sup> 小出光、徒然草、旺文社、1984、P. 14。

<sup>21)</sup> 安良岡康作、前掲書上巻、P. 442。



「色にふけり、情にめで、行ひを濁くして、百年の身を誤り、命を失へる例願はしくして、身の全く、久しからん事をば思はず、好ける方に心ひきて、永き世話りともなる。身を誤つ事は、若き時のしわざなり。」<sup>22)</sup> (第172段)

[または、恋愛に没頭したり、他人の愛情にふれて感動したり、思いきりよいふるまいをして、長い将来のある身を台なしにしたり、他人が命を失ったという前例が望む所となって、わが身が安全で、長生きすることは考えたりしないし、好色という方面に心がひっぱられて、後々まで長く、世間の語り草ともなったりする。このようにわが身をあやまることが多いのが、若い時の行動なのである。]

男女が若い情熱に溺れて、周囲事情もかかわりなく非理性的に行動して、自分自身を忘れてしまう。それで、一生を不幸に送り、また、他人に恥辱を受けるので常に男女間の行動を注意しろと警告している。

今まで列挙した例からのように男女の情は肉体の快楽を感じる役割もするが、欲情は仏教では禁忌視している。そして、一度まちがった考えをして若い情熱をぶちまければ女性は一生を不幸に送ると警覚心をうえつけてくれている。また、男性は常に女性の誘惑を警戒しなければならないと警告している。

#### 4. 否定的結婚観

兼好は人生を生きていきながら異性の意味を否定している。彼の主張は全然知らない女性と結婚して、家に迎え入れて同じ家で暮らすと言うことをぎこちないとした。

また、どのようにして老いて卑賤な自分のような男性と一生を暮らすようになる女性を思えば、そのような女性を軽蔑したいとした。そ

<sup>22)</sup> 安良岡康作、前掲書下巻、P. 188。



して、女性とは男性と結婚して暮らすことより結婚しないで暮らす方がずっと品位があるように見えるとした。結局、男女関係の位置から考えて見れば、結婚を否定することがよりのぞましいと兼好は否定的結婚観を論じている。

では、結婚否定論について例をあげて見よう。

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。『いつも独り住みにて』など聞くこそ、心にくけれ、『誰がしが婿に成りぬ』とも、また、『如何なる女を取り据ゑて、相住む』など聞きつれば、無下に心劣りせらるるわざなり。」<sup>23)</sup> (第190段)

[妻というものだけは、男の持つてはならないものなのだ。『あの人は、いつでも、妻がなくて暮らしている』などと聞くのは、奥ゆかしいものであるが、しかし、『誰その婿になってしまった』とも、あるいはまた、『これこれという女を家につれこんで同居している』などとも聞いてしまうと、ひどく見さげる気持ちに自然となるものである。]

兼好は中年が過ぎても妻を娶ることができなかった。彼は結婚する男性に現わされた女性について反感的な面だけを引き出して指摘し、結局結婚を否定し批判している。

女性と言うのは男性と結婚してお互いに心が合わない時、一緒に暮らすことより結婚しないで暮らすことがずっと品位があるように見えるとした。

また、毎日一緒に暮らして見れば嫌気がさすという等、男女間の結婚否定論をさげんでいる。

また、他の例をあげて説明して見よう。

「親・はらから許して、ひたふるに迎へ据ゑたらん、いとまばゆかりぬべし。……すべて、余所の人の取りまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品下り、見にくく、年

23) 安良岡康作、前掲書下巻、P. 283。

も長けなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやはと、人も心劣りせられ」<sup>24)</sup> (第240段)

[親・ぎょうだいが認め許して、何のじゃまもせずに、女を自分の家に引き取り生活の面倒を見てやるというようなのは、女にとりきっとひどく気まりわるいことであろう。……一般に、他人が男女の間をうまく処理しているというようなのは、何とも気にくわないことが多いことであろう。媒妁で迎えた妻が、立派な女であるならば、それについても、女より身分が低く、顔がみにくく、年の盛りを過ぎてしまったような男は、こんな賤しい自分のために、あれほどの女がもったいない身をむだにするものであろうかと、女の人柄も自然に軽蔑する気となり]

父母、兄弟が許諾したとしても、まったく知らない女性を受け入れて同じ家で暮らすということはきまづくなるとした。また、格調ある女性が老いてみともなような者に女性の一生をふみにじられてことを軽蔑したいとした。このように兼好は女性が結婚して一緒に暮らすことを否定していて、自身は女性と向かいあってすわることさえいやで劣等感も生じると否定的に結婚観を論じている。

## 5. 愛情無常観

兼好の愛情論は風が予め吹く前に褪色してしまう花のように変わりやすいことは愛情であるとした。また、男女間の離別は死別よりもっとかなしいことだと愛情の無常を言っている。人間の欲望中色欲のようなつまらない欲望をねがわないことが一番よいとした。

しかし、色欲のような愛情の欲望を歳月の流れによって無常であるという点を論じている。

<sup>24)</sup> 安良岡康作、前掲書下巻、P. 534。

愛情の無常に対して例をあげて見よう。

「掘川<sup>25)</sup>院の百首の歌の中に、昔見し妹がかき根は荒れにけりつばなまじりのすみれのみして。さびしきけしき、さる事侍りけん。」<sup>26)</sup>(第26段)  
[『拙河院の百首』の歌の中に、こういう一首がある。(昔逢った愛人の家を見た垣の根は、今はすっかり荒れ果ててしまった。茅草の茂りの中に、わずかにすみればかりが咲いていて)この歌の、寂しい様子は、そのようなこともございましたのでしょう。]

この内容は兼好自身の悲愛を歌っていることであると類推される。哀愁にあふれる心を表現していて、恋情は追憶の産物であり、結局愛情というのは無常なことであると言っている。

今度は第26段の前の部分を引用して見よう。

「風も吹きあへずうつるふ、人の心の花に、馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人の別れよりもまさりてかなしきものなれ。」<sup>27)</sup>(第26段)  
[風が吹き過ぎてしまわないのに早くも散ってゆく花、その花のように移り変わってしまう人の情愛にかつて親しんだ年月のことを思うと、しみじみと感銘の深いものだと思いたひとつひとつの言葉を今も忘れられないにもかかわらず、その人が自分の身の上からかけ離れた。遠いものになってゆく世の中の常例は、ほんとうに、故人との死別よりも一層悲しいものである。]

愛情と言うのは風がはまだ吹く前に褪色してしまう花のように変わりやすく、愛情というのは風に吹かれて落ちる落葉のように常に変わりやすいものとした。

尚且、愛情ははかなく悲しい。これだけをどうしようもない。どんなに情熱を燃やした恋であっても、愛ははかなく無常であることを源

②5) 第七十三代の堀川天皇、十六名の重臣下たちに一年に百首ずつの和歌をつくって奉るようさせた。

②6) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 136。

②7) 安良岡康作、前掲書上巻、P. 136。

氏物語で紫式部も訴えていた。<sup>28)</sup>

それで、兼好も昔の追憶を想起しながらそのよかった時節に対して今は愛愁を感じるとした。そして、男女間の別離は死別よりもっとかなしい愛情の無常を感じると言っている。兼好の若い時節の恋愛についての追憶を話していることのように感じられる。

今度は人間の欲望について例を上げて見よう。

「楽といふは、好み愛する事なり。これを求むること、止む時なし。楽欲する所、一つには名なり。名に二種あり。行跡と才芸との誉なり。二つには色欲、三つには味ひなり。万の願ひ、この三つには如かず。……求めざらんには如かじ。」<sup>29)</sup> (第242段)

[その楽というのは、何かを好きこの人でそれに愛着することである。人間は、その楽を追求して、終わる時がないのである。人間が願ひ欲するものは、第一には、名声である。その名声には、二種類がある。行状と学問・芸能との二つにすぐれているという評判である。第二には、見る目を楽しませる欲望、第三には、食欲である。ありとあらゆる願ひも、この三つに及ぶものはない。……だから、これらの欲を追求しないのに越したことはあるまい。]

人間の欲望中名誉欲、色欲、食欲の三大欲望を仏教的な側面から見ても、欲望の追求を抑制し、また、否定している。また、色欲等つまらない欲望を願わないのが一番よいとして、このように願う欲望も歲月の流れによって無常だと言うことを言っている。

兼好の愛情観を要約して言えば、風になびいて落ちる落花のように変わりやすいものだとした。また、そのよかった時節の恋情是一场春夢のようだと愛情の無常観を強く主張している。

### Ⅲ. 結 論

<sup>28)</sup> 赤根祥一、前掲書、P. 82。

<sup>29)</sup> 安良岡康作、前掲書下巻、P. 548。

兼好の女性観を言えば一つの例で禅泥はたとえ女性ということであるが、聖人の精神と相通するとした。また、りっぱな伯母である安喜門院の厳格な教育で九条忠教のようなりっぱな人才を育てることになったと女性を称讃している。自分の子のために引っ越しを三度したとする孟母三遷の孟子の母親のようになりっぱな人物の背後には必ず、りっぱな女性の隠れた功があるとたいそう女性を讃揚している。女性の人柄について言えば、品位ある女性は男性が遠ざける時、男性が尋ねて来ることができるよう機会をつくってやる知恵深い女性が品位があるように見ると女性を称讃している。また、男性を送った後にもすぐ妻戸を閉めず、ひとり月を見て男性をもう一度考えるという余裕ある女性を称讃している。そして、雪が積もった日の朝、すてきなその情趣を手紙に一行も書かない男を風流がないと叱責する本当に風流と粋のわかるそのような女性を極讃している。

男女の情からは、恋を失恋、しのぶ恋、待つ恋、追憶恋がよいとし、また、あわぬ恋に情趣があるとする始終の情趣を讃揚している。そして、酒づきを握る男性のうでにぶらさがるとのようないやしい行動をする女性を無礼だと叱責したりもして、また、我執と貪欲等でいっばいの女性を蔑視したりもした。

男女の情はきりがたく女性の誘惑は久米の仙人も神通力を喪失する程男性の心を乱すので注意しろと警告もした。尚且、第190段の否定的結婚観の例をあげて説明すれば、「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ『いつもひとり住みにて』」

{男性は本当に妻をもたない方がよい。『いつも一人暮らしいて…』} と言うような結婚しないで一人暮らしていることを品位があるように見ると否定的結婚観を主張している。また、男女の情は切りがたいとして、若い時まちがった考えのために欲情は男女不問として平生を不幸にするとした。

結局、男女の恋情は追憶の産物であり、愛ははかなく無常であると結論づけた。

## 参 考 文 献

- 安良岡康作：徒然草 全注釋上，下卷，角川書店，1991.
- 小出光：徒然草，旺文社，1984.
- 赤根祥一：無常の思想，れんが書房神社，1980.
- 三木紀人：方丈記・徒然草，尚学図書，1980.
- 風巻景次郎：中世の文学伝統，岩波文庫，1985.
- 有情堂編集部：徒然草講座，有精堂，1983.
- 林瑞栄：兼好発掘，筑摩書房，1983.
- 宋肅庚：徒然草，乙酉文化史，1975.
- 川瀬一馬：徒然草校主，講談社，1980.
- 久保田淳：研究資料日本古典文学，明治書院，1979.
- 守屋毅：日本中世への視座，日本放送出版協会，1985.
- 永藤靖：中世日本文学と時間意識，未来社，1984.
- 神田秀夫外校注：方丈記・徒然草，小学館，1981.
- 西尾実：方丈記・徒然草，岩波書店，1982.
- 久保田淳：徒然草必携，学燈社，1981.
- 唐木順三：中世の文学，筑摩書房，1955.
- 西田正好：無常の文学，搞新書，1975.
- 福田秀一：中世文学論考，明治書院，1975.
- 田辺 爵：古典評釋，徒然草，右文書院，1986.
- 藤原正義：中世作家の思想と方法，風間書房，1981.
- 唐木順三：無常，筑摩書房，1985.
- 申鉉夏：日本古典文学，学文社，1986.
- 呉永珍：和歌選集，教学研究社，1986.
- 李在銑：韓国文学主題論，西江大学校出版部，
- 李相淑：李光洙の愛情小説に現われた女性と教育，高麗大語文論集，1981.